

アンタナナリボの都市内部構造

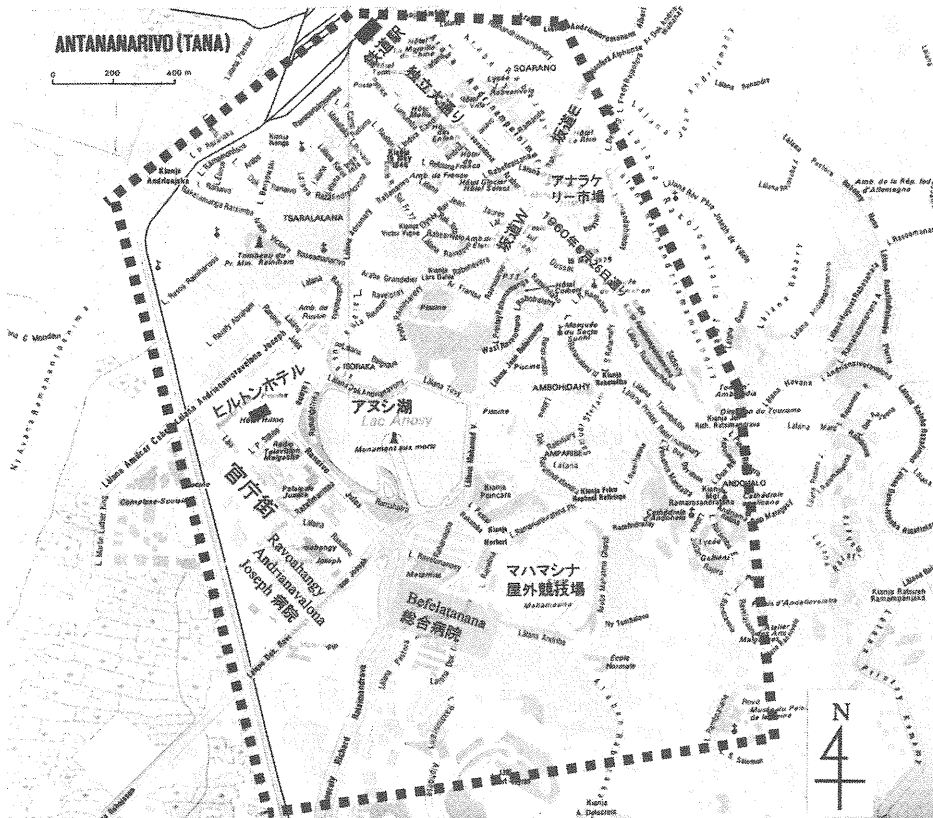
寺谷亮司 (愛媛大学 地域創成研究センター)

I. はじめに

筆者は、これまで東アフリカおよび南部アフリカ諸国の都市について、土地利用や住民特性に関する都市地理学的調査を実施し、いくつかの報告をしてきた(寺谷, 1999・2007・2009など)。1人当たり国民総所得(2010年)による世界銀行の国分類に従えば、上記調査を実施した7ヶ国の内訳は、中所得3ヶ国(セイシェル(9,710ドル)、モーリシャス(7,750ドル)、南アフリカ共和国(6,090ドル))と低所得4ヶ国(ケニア(790ドル)、コモロ(750ドル)、モザンビーク(440ドル)、マダガスカル(430ドル))である。このように、本稿の研究対象であるマダガスカル共和国は、上記アフリカ諸国のなかでも経済・所得水準が最低位に位置づけられる。

本稿の目的は、2007年1月6～10日に実施した現地調査に基づき、マダガスカル首都アンタナナリボ(Antananarivo)の都市内部構造や都市景観を概観することである。

アンタナナリボの都市特性としては、まず以下の3点を指摘したい。第1は、中心業務地区(CBD)の不在である。ほぼ100万都市でありながら、アンタナナリボには、典型的な都心景観としてのオフィスビルが林立する中心業務地区が形成されていない。それどころか、商社、銀行、官庁などのオフィスが入居するオフィスビルと呼べるような高層建築物すら見当たらない。市内で最も高い高層建築物は、アヌシ湖(Lac Anosy、写真1、以下本稿の写真は全て上記調査時の寺谷撮影による)畔にポツンと建つヒルトン・マダガスカル・



第1図 アンタナナリボ中心部地図

(原図はFreitag-Berndt社発行『Madagascar 1/200万』(2003)付図のアンタナナリボ図)(縮尺1/14,700)、点線内の領域がアンタナナリボ都市中心部

ホテルである（第1図、写真2）。1975年に建設された同ホテルは、地上15階建てであり、もうすでにかなりくすんだ外観となっている。最近30年間このホテルと同等以上の高層建築物が建造されていないことは、民間企業オフィスの少なさとともに、マダガスカル経済の沈滞振りをよく示している。

第2は、都市が丘陵部に立地しているため、必然的に坂や斜面地が多くなり、フランス植民地時代以来のオレンジ色の瓦屋根をもつ伝統家屋とともに、風情ある都市景観を形成している点である（写真1・3）。ただし、整備されずに廃墟化した建物も散見され、わが国と同様、縦横に走る電線が都市景観を台無しにしている点も否めない（写真3）。

第3は、アフリカ都市の特性としてのスクオッター集落やインフォーマル人口の多さである。とりわけ、ストリートチルドレンのみならず、裸足で歩く歩行者が都市中心部でもかなり見られるのは印象的である。

II. アンタナナリボの概要

アンタナナリボは、マダガスカル島のほぼ中央の丘陵地帯に位置する。同市は、南緯18度54分と低緯度に位置するが、標高が1310mと高いため、比較的温和な気候であり、年平均気温は18.8℃（1961～1990年）である。

アンタナナリボは、かつてはホヴァ族の村落だったが、17世紀末から18世紀初頭にかけて、メリナ王国の

アンドリアンジャカ王により都市として建設された。同王国によるマダガスカル統一後の1794年には、当地北方21kmのアンブヒマンガ（Ambohimanga、写真4）から遷都され、1896年にフランスの植民地になった後も植民地政府の首都がおかれた。独立した1960年以降も、アンタナナリボは、マダガスカル共和国の首都として、同国最大の都市であり、政治・経済の中心である。

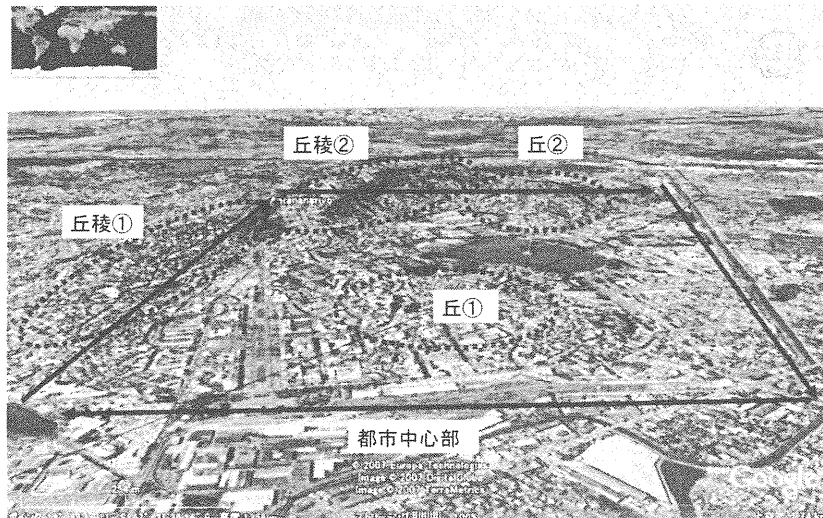
アンタナナリボ市域は、約10km四方の面積107km²であり、2001年現在の人口は90.3万人とされる（Ministre De L'Agriculture, De L'Elevage et De La Peche, 2003）。アンタナナリボ市の人口の推移をみると、1975年45.2万、1991年56.6万であるから、1990年代以降に人口が急増したことがわかる。

アンタナナリボの広域都市圏は、12の副県（sous-prefecture）とその下の188の郡（arrondissement）から構成される。その総面積は25,647km²、2001年現在の総人口は309.2万人である。同広域都市圏の農業就業者比率は1993年73%、1999年89%と高く、農業就業者が極めて多い。また景観的に見ても、アンタナナリボ市街を抜けると、低湿地は水田に利用され、丘陵部に農村集落が点在する農村地帯が広がる（写真5）。

III. アンタナナリボの都市内部構造

1. 都市中心部

上記のように、アンタナナリボには明確な中心業務地区は存在しない。ただし、地形、土地利用、景観な



第2図 アンタナナリボ中心部衛星画像
（北方から都市中心部を望む、グーグルアースにより作成）

どからみると、マダガスカルの都市中心部は、第1・2図に示した範域と判断される。すなわち、西部と北部は鉄道線路、東部と南部は丘陵（丘陵①・②）と丘（丘②）に画された約1.5km四方の範域である。都市中心部内において、とりわけ特徴的な地域としては、商業中心としての駅前通り周辺地区、官庁や公共施設が集中するアヌシ湖周辺地区がある。

a) 駅前通り周辺商業地区

アンタナナリボにおいて、道路幅が最も広くて立派な目抜き通りといえば、鉄道駅から南東方向に伸びる駅前通りとしての「独立大通り」(Ave. de l'Independance)である。ただし、現在鉄道は週2便の貨物列車しか走っていないため、鉄道駅前の門は通常閉じられたままである(写真6)。地形的に言えば、当該通りは、東側は丘陵①、西側は丘①に挟まれており、いわば「谷底通り」である。通りの構造としては、歩行者が休憩できる芝生が中央にあり、その両側に順に、歩道、片道2車線の道路、駐車スペースそして雁木構造をなすクリーム色の3階建て建物が道路沿いに並んでいる(写真7)。立地場所と施設の点からみても、当該建物の1階は市内随一の営業店舗スペースであり、銀行、電気店、土産品店、ホテルレストランなどが入居しているが、空き店舗スペースが目立ち、通行客もそれほど多くはない。

「独立大通り」に続く駅前通りは「1960年6月26日通り」(Ave. 26 juin 1960)と呼ばれ、郵便局本局、商店、レストランが並び、通行客が多い(写真8)。さらに、この通りの北側には、アンタナナリボ中心部で唯一最大の常設市場である「アナラケリー市場」(Analakely Market)が立地し、買物客で混み合っている(第1図)。同市場は、オレンジ色の瓦屋根小屋が連なり、肉類や野菜などの生鮮食料品、靴や身の回り品などの雑貨を扱う店舗が多い(写真9)。また、市場周辺には、多種多様な商品を並べる露店や行商人が多く、インフォーマル・セクターの見本市のようである。管見した事例を一部記すと、空き瓶、テレビアンテナ、新聞、携帯電話、自家製のビン入り薬などの露店、買物袋、ベルト、タオル、便器掃除具、特産のパニラなどを売り歩く行商人などである(写真10・11)。とくに、同市場付近から東側の丘陵①と西側の丘①に向かって長い石段街路(坂道Eと坂道W、第1図)が通じており、これらの道沿いにも露店が並んでおり、壮観である(写真

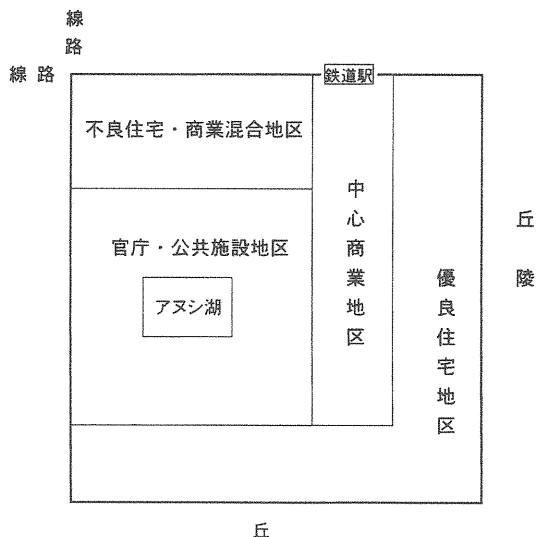
3・12)。以上のように、「1960年6月26日通り」と「アナラケリー市場」の駅前通り周辺が、アンタナナリボにおける最大の商業中心地区である。

b) アヌシ湖周辺官庁・公共施設地区

人工湖であるアヌシ湖は、官庁や公共施設に取り囲まれており、アンタナナリボ最大の官庁・公共施設地区が形成されている。北岸から反時計回りを見ていくと、まず北岸は小高い丘上地区(丘①)に相当し、樹林に囲まれた広域な敷地を有する大統領府、経済省、商務省などの官庁や日本大使館などの各国大使館が立地する。南西岸は、農務省、文部科学省、運輸省、労働省、土地・不動産省、経済計画局、統計局、裁判所、マダガスカル国営テレビなどの建物が連なる純官庁街である(写真13)。南岸には、Befelatanana 総合病院、Ravoahangy Andrianavalona Joseph病院の2大病院をはじめ、病院が集中する(第1図)。さらに、南東岸にはマハマシナ(Mahamaina)屋外競技場(写真2)、東岸にはいくつかの学校が立地している。

c) 住宅地域

アンタナナリボ都市中心部の主たる住宅地域は、東側から南部にかけての丘陵部であり、丘陵斜面や山麓地域が該当する。当該地区には、比較的良好な住宅が多く、壁色は白色とオレンジ色、屋根色はオレンジ～濃いレンガ色が卓越するので、統一感があり、落ち着いた印象の都市住宅景観が見られる(写真14)。斜面地であるため、道路網は地形に従って複雑であり、道路は細く、坂道も多い。



第3図 アンタナナリボ中心部模式図

一方、中心部の北西部は、平坦地であるが、道路沿いには露店が数多く見られ、「下町」的色彩が強くなり、不良住宅が多い住商混合地区となっている。さらに住宅水準が劣悪で、スクオッターと判断される住宅は、中心部の各地に散見される（写真15）。

以上述べてきたように、アンタナナリボの都市中心部は、商業中心としての駅前通り周辺地区、官公庁・公共施設が卓越するアスン湖周辺地区、東部から南部にかけての丘陵部の優良住宅地区、北西部の不良住宅・商業混合地区に大きく区分できる（第3図）。

2. 都市郊外地域

a) 概況

アンタナナリボ郊外における住宅、商業、工業について概観したい。アンタナナリボ郊外における都市化の大まかな進展状況を見ると、アンタナナリボ中心部からみて郊外の東半分が丘陵、西半分が低湿地という地形の東西差によって、東部を中心とした郊外東半地域において宅地化の進展が著しい。郊外地域の住宅水準をみると、都市中心部に比べ、概して不良である。とりわけ、西部や西北部の低湿地にはスラムやスクオッターが多いため、都市中心部と同様、住宅水準は「東高西低」パターンである。

さらに、アンタナナリボ中心部から郊外に放射状に延びる主要道路の街村化によって、都市的地域の「ヒトデ状拡大」もみられる。その方向は、西方面への国道1号線沿い、東方面への同2号線沿い、北方面への同3号線沿い、北西方面への同4号線沿い、南方向への同7号線沿いなどであり、道路沿いには商店、食堂、露店などの営業施設が多い。また、生鮮食品などを販売する常設市場も郊外各地に分布するが、2005年に改装されたばかりの市内南西部のアノシベ（Anosibe）市場（第4図、写真16）を除けば、劣悪な施設と衛生環境である点は疑い得ない。

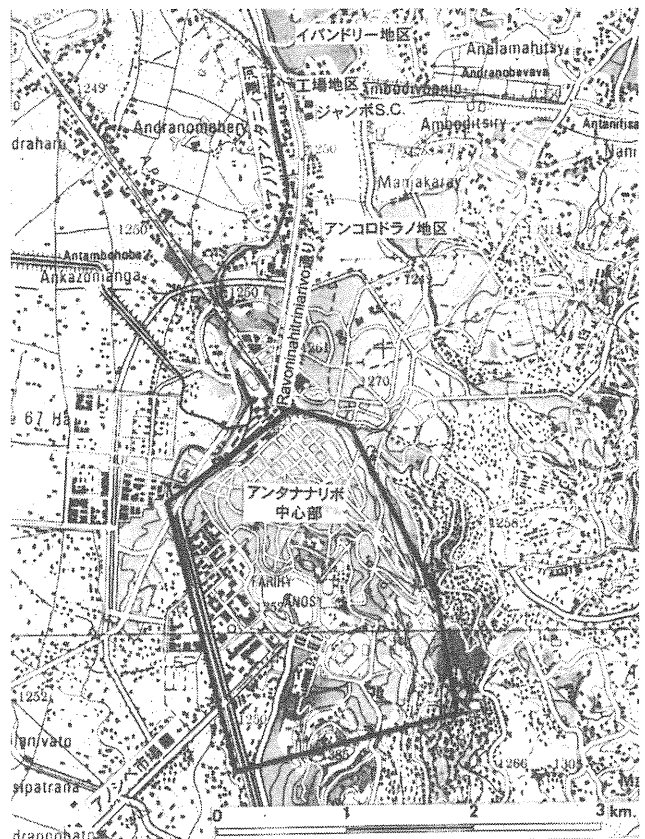
主たる工場地区は、北部郊外およびイヴァト国際空港へ通じる北西部郊外にある。外国資本による進出工場が多く、近年は労働者を本国から持ち込んでの中国系資本（写真17）が目立つ。

b) 北部郊外地域の景観

最後に、北部郊外地域の景観や土地利用など

について述べたい。アンタナナリボ市街からまっすぐ北に延びるRavinahitriarivo通りを北上して行くと、やがて住宅が途切れ、自動車関連事業所が目立つ郊外景観となる（第4図）。さらに北上すると、右手にはフランス資本のジャンボ（Jumbo）・ショッピングセンター（写真18）、そしてモーリシャスの衣料会社・フローリアル社の工場などが立地する工場地区となる。また、当該道路を東側に入ったイバンドリー（Ivandy）地区やアンコロドラノ（Ankorondrano）地区は、豪邸が建ち並ぶ高級住宅街である（写真19）。これに対して、当該道路のすぐ西方を流れるアノリアンタニ（Anoriantany）運河沿いにはスクオッター集落が点在する（写真20）。

以上のように、アンタナナリボ郊外においては、最近では欧米都市のような高級住宅街、郊外ショッピングセンター、自動車関連事業所の集中地域が見られる一方、基本的には不良住宅地域が多く、とりわけ河川沿いなどにはスクオッター集落が目立つ。



第4図 アンタナナリボ広域図

(FTM(マダガスカル国土地理院)発行「Antananarivo 1/5万」(1988))
(を一部改変、実線内の範囲がアンタナナリボ都市中心部)

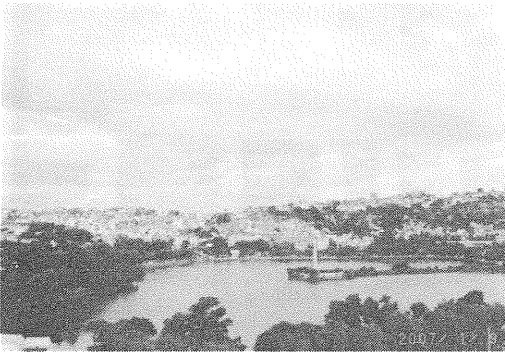


写真1 アヌシ湖と丘陵都市景観
(ヒルトンホテルより撮影)



写真2 アヌシ湖南東岸地区
(マハシナ競技場とその向こうにアヌシ湖とヒルトンホテル(矢印)が見える、丘陵②より撮影)

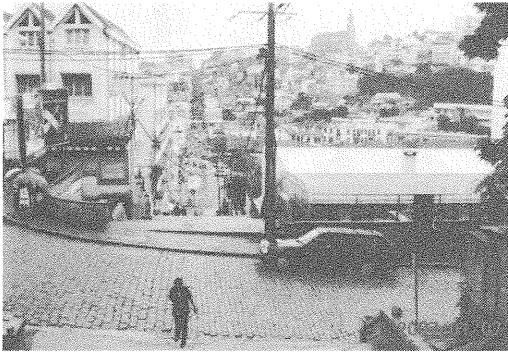


写真3 都心西側の石段街路
(坂道W、都心西側の丘(丘①)より東側の丘陵(丘陵①)を望む、電線が空中を走る)

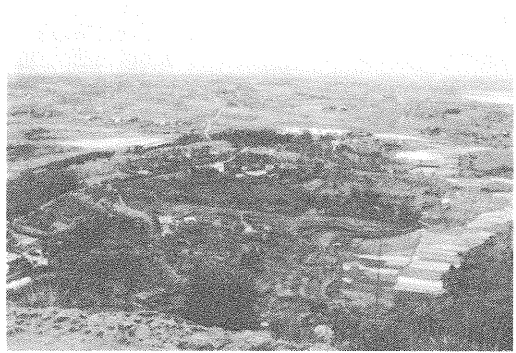


写真4 アンピヒマンガ王宮跡から南方のアンタナナリボ方面を望む



写真5 アンタナナリボ郊外の農村景観



写真6 アンタナナリボ鉄道駅
(駅前の門は閉まっている)



写真7 独立大通り(駅前通り)
(駅前より南東方向を望む)



写真8 1960年6月26日通り
(向こう側が鉄道駅方面)

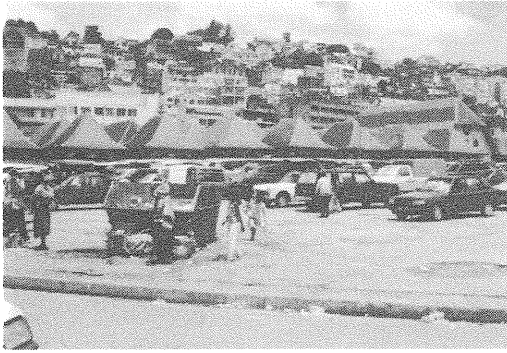


写真9 アナラケリー市場
(とんがり瓦屋根小屋と周囲に多くの露店)

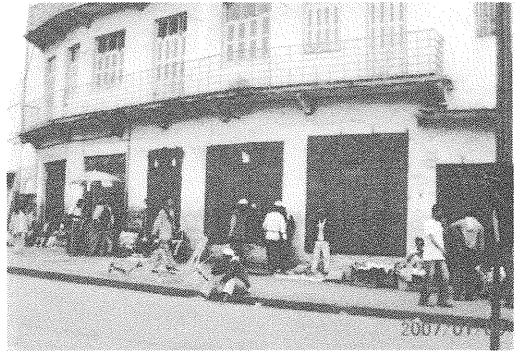


写真10 露店の事例
(手前のアンテナ売りなど)



写真11 行商の事例
(タオル売り)



写真12 都心東側の石段街路(坂道E)
(向こうに見えるのが西側の階段街路(坂道W))

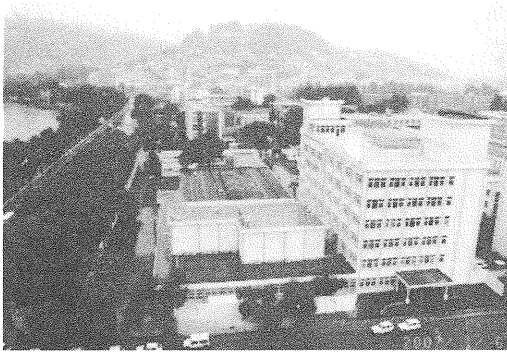


写真13 アヌシ湖南西岸の官庁地区
(最も手前が国営テレビ、向こうに見えるのが丘②、ヒルトンホテルより撮影)



写真14 東部丘陵(丘陵①)斜面の住宅地

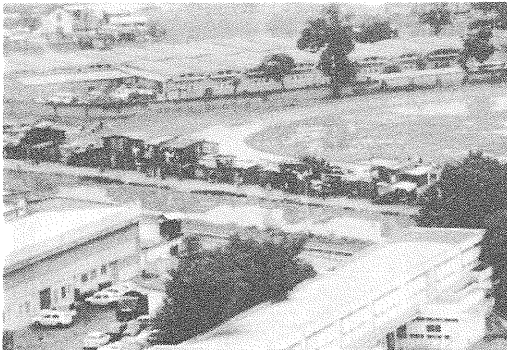


写真15 運河沿いのスクオッター集落
(手前に学校そして運河、その向こうにスクオッター、さらにグラウンドと学校)

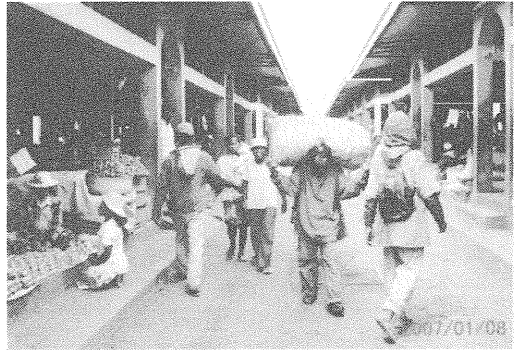


写真16 アノシベ市場内の様子
(市場内部はきれいだが、場外にでると汚い店舗や露店が集中)

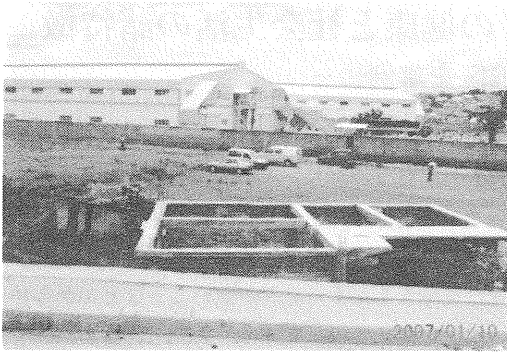


写真17 イヴァト国際空港近くの中国系資本工場



写真18 フランス資本のジャンボショッピングセンター

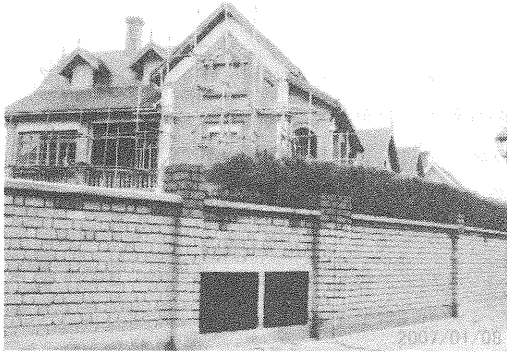


写真19 アンコロドラノ地区の豪邸



写真20 アリアンタニ運河沿いのスクオッター集落

IV. おわりに

本稿で述べてきたアンタナナリボの都市内部構造を要約すれば、以下のとおりである。

①アンタナナリボの都市中心部は鉄道線路と丘陵に画された約1.5km四方の範域である。当該地域には、オフィスビル景観を呈するCBDがみられず、最大商業地区としての駅前通り周辺地区とアヌシ湖周辺の官庁・公共施設地区が特徴的である。

②アンタナナリボ都市中心部の住宅地域をみると、東部から南部の斜面地はオレンジ色を基調とした壁・屋根を有する良好住宅が卓越する一方、北部や西部は不良住宅が多い住商混合地区であり、住宅水準は「東高西低」パターンである。

③アンタナナリボ郊外は、主要通り沿いに自動車関連施設などの営業店舗、さらに一部に工場地区や高級住宅地もみられるが、スクオッター集落が圧倒的である。このため、アンタナナリボの都市内部構造は、先進国都市とは異なり、住民の社会経済階層が都市中心部で高く郊外はスラム地域が卓越する、アフリカ都市モデルにほぼ合致するといえる。

なお、本稿は、2004～2006年度科学研究費補助金「新開地都市の形成・発展に関する地域間比較研究」（基盤研究（C）、課題番号：16520488、代表者：寺谷亮司）の成果の一部である。

【引用文献】

- 寺谷亮司（1999）：「植民地都市・ナイロビの都市内部構造(1)―都市発達史とCBDを中心として―」、愛媛の地理、14、33-48。
- 寺谷亮司（2007）：「南アフリカ共和国・アパルトヘイト都市」、漆原・藤塚・松山・大西 編『図説 世界の地域問題』、ナカニシヤ出版、50-51。
- 寺谷亮司（2009）：「ポートルイスとカトルボルヌーアフリカの小さな島国の首都と商業都市―」、都市地理学、vol. 4、106-113。
- Ministre De L'Agriculture, De L'Elevage et De La Peche (2003) : 『Monographie De La Region D'Antananarivo』。